

仏独合作で昨年制作されたドキュメンタリー映画「日本、天皇と軍隊」の上映と、この映画を監督した渡辺謙一さんらをパネリストに天皇制と憲法9条の関係などを考える催しがこのほど福岡市中央区の九州日仏学館であった。

参加したのは、ほかに西南女学院大の菅英輝教授（日米外交史）と九州大の南野森准教授（憲法学）。

映画は映像と歴史資料を織り交ぜ、昭和天皇が連合国の戦争責任追及を免れたことと、戦争放棄・戦力不保持を盛り込んだ憲法9条をパッケージとして描く。天皇制の維持は、日本政府が「9条」を受け入れたことになったという解釈だ。

昭和天皇が記者会見で広島への原爆投下を「戦争中だから、広島市民には気の毒だが、やむをえないこと」（大意）と語る場面と、敗戦2年後の全国巡幸で広島を訪れた天皇に、市民が熱狂的に「万歳」を唱和するラストシーンは特に暗示的だ。

上映後、渡辺監督は「天皇制と9条の関係は憲法論議の際に忘れられがちな観点」と語った。南野准教授も「憲法は元々、王様と軍隊を縛る目的で作られた。天皇制論議をタブーにしてはいけない」と話した。会場からも活発な意見が出された。

ただ「TOKKO―特攻―」などもそうだが、こうした議論の契機となるドキュメンタリー作品の多くが「輸入もの」であることがもどかしい。

（鳥居達也）



天皇制と憲法9条を巡って論議する映画監督の渡辺謙一さん（左）ら＝福岡市中央区

「アスパラクラブ」 (<http://aspara.asahi.com>) の記者ブログ「こちら博多駅前 文化堂」にもトップ記事を掲載します。